徳島教育大綱（仮称）策定に係る意見交換会　議事録

日時：平成 27 年 8 月 4 日（火）9:45 ～ 10:50
場所：徳島県庁 3 階 特別会議室

１　開会

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

皆さんおはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただきましてありがとうございます。 ただ今から、徳島教育大綱策定に係る意見交換会を開催いたします。私、本日の司会を務めさせていただきます政策創造部七條でございます。どうぞよろしくお願いいたします。本日ご出席いただいております方々を本来ならご紹介させていただくところでございますが、時間の関係でお手元の名簿と配席表でのご紹介とさせていただきます。それぞれご確認いただけたらと思います。また、資料につきましてはお手元に「資料１」から「資料５－２」までの６種類の資料、並びに本日欠席しております竹内委員さん及び岡田委員さんから事前にいただきましたご意見につきまして配布させていただいております。意見交換の際の参考とさせていただければと思っております。

本日の意見交換会につきましては去る７月７日に開催されました平成27年度第１回「地方創生“挙県一致”協議会」におきまして、青木委員さんより徳島教育大綱に対して若者の視点からの意見を大綱に反映していただきたいという、大変ありがたいご意見をいただきまして、総合計画審議会若者クリエイト部会の皆さんとも意見交換会を開催させていただくことになりました。本日の意見交換会でのご意見やご提言につきまして、徳島教育大綱の策定の参考とさせていただきたいと考えております。

２　議事

徳島教育大綱（仮称）の策定に係る意見交換

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

それでは、議事に移らせていただきます。議事につきましては飯泉知事に進行をお願いしたいと思います。なお、ご意見がある方はご発言の前にお手元にございますマイクのスイッチを押してご発言いただければと思います。それでは、飯泉知事、よろしくお願いいたします。

（議事進行）

＜飯泉知事＞

おはようございます。今日は徳島教育大綱策定について、先般、若者クリエイト部会の代表で会議に入っていただいておりました青木部会長さん、福島副部会長さんから、若者クリエイト部会の皆さんとの意見交換を実現をしてもらいたい、こうしたお話があったところでありまして、今日は

その実現の運びとなったところであります。

実はこの教育大綱策定ということで、今までは知事が教育の大きな方針であるとか、あるいはその方向性などについて口は出さないというかたち、予算や条例に口を出すということはやるわけなんですが、しかし、例の滋賀県でのいじめ事件をはじめとして、あまりにも教育現場の対応が遅いんではないか。もっともっと市民、県民、国民と近いところからの意見が直接反映できる、こうしたかたちが必要ではないか、ということで、これまで首長と言われる知事、市町村長は教育に口を出さない、そうした点を、いやいや一緒になって、そして教育の大方針を作ったらどうだろうか。こうしたかたちで、法律なども改正される中で、実現をした運びとなっております。

また、多くの団体では、今までの例えば教育のいろいろな方針、これをオーソライズする。そうしたかたちでもいいという話もあるわけでありますが、ちょうど時はあたかも今「地方創生」だと。また、2060年をターゲットとして、これからの日本、あるいはそれぞれの都道府県、市町村をどうしていくのか。国としては１億人という、今１億3,000万人の国民を何とか１億で留めたい、という話が出ていますね。しかし、この数字というのはそう簡単に実現できるものではなくて、これは東京なども入っているわけですから、そうした点を考えると、徳島として全国平均のトレンドで果たして大丈夫か、これもかなりの努力がいる。でも、こうした点について県民の皆さんに未来に夢を持っていただく必要があるだろうと。つい先般でありますが、「とくしま人口ビジョン」を作らさせていただき、ちょうど１億、国全体のトレンド、つまり平均として持ってくると、ちょうど60万1,000人ということになりますね。ということでなかなかこの数字も難しいものでありますが、これを最低のラインとしようと。そして例えば社会増が社会減を上回るであるとか、自然増と自然減、このあたりも均衡になる。こうなると合計特殊出生率の問題とかね、こうしたことも出てくるわけでありますが、このあたりも１．８。これがちょうど国がそれを目指していこうということですから、我々としても最低のラインとしてこの１．８を掲げさせていただくとともに、一番上のところ、これは努力をすれば可能になるであろうという65万超ということにさせていただきました。

そうなって参りますとやはりこれからの徳島、日本を背負って立っていただく若い皆さん方の意見をこの教育の中にしっかりと入れていく必要があるだろう。そしてこの「地方創生」を成し遂げるための人材の育成、そのための徳島ならではの対策、あるいは目標といったものをしっかりと掲げるべきだろうということで、実はこれまでの２回の総合教育会議の中で、今言った方針については既にその方向性が固まったところでありますので、ちょうど青木部会長さんもおっしゃっていただいた、若者を代表する皆さん方のご意見をしっかりとこの中に反映をしていこうというのが、今日の会議の主旨ということでありますので、ここからは、皆様方には自由に思いの丈をすべてお話を、時間のある限りですね、おっしゃっていただければと思いますので、どうぞよろしくお願いを申し上げたいと存じます。

ということで、早速、議事に移りたいと思います。まず、今日の主目的であります、徳島教育大綱（仮称）に係る意見交換を行って参りたいと思います。それでは、ここからは順々にでありますので、じゃあまずは、近森委員さんお願いいたします。

＜近森委員＞

先ほど、竹内委員さんと岡田委員さんからのご意見は資料に記載されているということで、私ちょっとこの前にお話をする機会がありまして、皆さんといろいろディスカッションさせていただきました。その時に竹内委員さんと岡田委員さんからもお話を聞きまして、私自身は自分にとって教

育ってどういうことかなと考えていまして、そのときにやはり、私も海外に行かせていただく機会がありまして、そういう時に、自分がいかにどういう強みを持っているのかというのはものすごく感じています。私自身あんまり自分の強みが何かって言われるとちょっと考えるっていうのがあるんですけど、私もこの年になってまだ自分探ししていることもあるんですが、そういうのはたぶん小さい時から自分はこういうことがすごく欠けていて、自分の強みはこれだっていうものを言えるような教育をやっていくのはすごく大事だと思っております。竹内さんも具体的に教科による飛び級制度であるとか、すごく明確に言っていただいてたので、そういうのはすごくそういうところに結びつくのではないかと思いました。

あとは、教育大綱について私自身もどこまで理解しているか不安なんですが、教育というとやはり子どもに対する視点っていうのが大きいと思うんですけど、子どもを取り巻く大人に対しても何かそういうものを入れていただければいいかなというふうに思います。 というのは、これも子どもを取り囲む大人が一番責任がある。子どもに対しては何もないってわけではなく、大人がどういうふうなものを見ていくかということで子どもはすごく変わりますし、影響を受けますので、そういうところも是非、取り込んでいただきたいと思います。

具体的な話はできてないんですが、サマースクールというのを今年の８月に行われると思うんですけど、私もちょっと関わらせていただいておりまして、８月17日に私も高校生の人たちとお話をする予定になってるんですが、そこではハーバードの学生とかバイリンガルの大学生と一緒に高校生が一週間を過ごすというプログラムで、すごくすばらしいものなんですが、ちょっと特別というか、とっても短期間になっていて、高校生30人くらいなんですが、それよりもっと裾野を広げて、本当にインターナショナルスクールみたいなものを徳島県でできないかなと思っております。それは英語を学ぶっていうのがメインではなくて、やはりサマースクールも、英語を学んで、それを通した人材育成を掲げてますので、私自身も英語は強みだというふうに思ってますが、英語だけでなく多言語というのも可能性としてはあると思うので、そういうインターナショナルスクールみたいなものを徳島県でゆくゆく打ち出すのは、私自身もすごく興味があるし、自分の子どもを通わせたいって思う人もたくさんいるのではないかなと思います。私からは以上です。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。確かにおっしゃっていただいていたように、これからグローバル化ということで、若いうちからもう英語は当然身につけている、得意分野として当たり前のものとして持っているというのが重要で、後はその苦手意識はね、割と日本人って英語の苦手意識が強いんですけども、それをすっと入れるようにね、ということがありますので、今のご意見というのは大変貴重だと思います。ありがとうございました。

それでは席順に順々にいこうかと思いますので、それでは池添委員さんお願いいたします。

＜池添委員＞

私も先日お配りいただいてました資料を一通り目を通して参りましたけれども、その中で共感する点はかなりたくさんありました。特に地方創生という視点から、地域のことを知るために、地域に出向くであるとか、職業体験するとか、そういうことは本当に重要ではあるかと思うんですが、あとは、テストで100点を取るという教育ではなくて、本当に人間としてどう生きるかということで、地域を愛する気持ちを育てるというところが非常に重要になると思っております。私の研究テ

ーマのひとつとして、子育て支援の制度について海外で見せていただくような機会があったんですけれども、例えばカナダとかでしたら、子どもの人権について、保育園なんかでも絵が貼ってあったりとか、子どもの権利条約について言葉が分からないうちから、あなたは生きる価値があって、勉強もできて守られることが権利としてあって、その権利の代わりに義務もあるんだよということで社会として自分がどういうものかみたいなことを、今の日本って中学か高校になって初めてそういう権利とか、あと、憲法とか、そういうことが教育として入ってきて、実体験としてあまり持っていないのかなというところがあって、そうなると自分がいろんな壁にぶち当たったときに、単に大学に行くことが生きていく術なのかということを思うのではないかなと、普段学生と接していてもかなり思います。そういった意味で、結局、地域に愛着を持つというところに繋げるためには、一番最初の出発点として自分が生きる価値があって、社会の中でどう関わっているから自分も社会の中でどうしていかなければいけないかというところを積極的に徳島県は教えていくというか、それが当たり前なんだということを感覚的に小さいうちから親が100％教えられることというのは、家庭によって全然違いますので、その辺りも海外に調査に行って、保育園というのは、社会的な人材を育てるためにも、社会で子どもを育てるためには一歳から社会教育が必要であって、二十歳になった時の犯罪者率とかは、一歳児の保育園にかけるお金を考えても、そういう情操教育というのは大事だという考え方なんですが、社会として子どもを育てていくことの考え方ですね、かなり抽象的なんですけれども。それを個人個人理解できるような教育というのが根底にあって欲しいなということが一つです。

あとは、細かいところでいきますと、私も近森委員がおっしゃった地方の教育、子どもを取り巻く大人にも関係したっていうところが、先ほど申しました、小学校以前の教育のところが一番関わってくると思います。子どもから親が質問を受けた時に答えるためには、結局自分自身の知識も必要となるので、必然的にそういうことがあるのかなというのと、竹内委員が挙げられているビデオ教材・オンライン授業というのは、まさに高専機構を筆頭に展開しておりますけれども、今、学生のスマートフォンであったりとか､学生が持っている媒体に任せているような状況でありますので、やはりＩＴの進んでいる徳島から、小学校の時から積極的にそういうものを一人一台ずつタブレットとかパソコンを配布をしてですね、積極的にＩＴとの付き合い方を教えて、そういう教育をしていくと、地方の遠隔地であっても同じレベルの教育が受けられるということもあるのではないかなということを考えて参りました。とりあえず以上２点、述べさせていただきます。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。確かに昔は社会で子どもを育ててたんですよね、みんな。それと今おっしゃっていただいた小学校以前の教育が重要だと。場合によっては徳島の強みを生かしていこう。これがＩＴだということでね。日本というのはどちらかというとＩＴの陰の部分ばっかり、教育の世界でも取り上げてしまうんですね。だからＬＩＮＥを使わすなとか。逆に徳島の教育委員会はＬＩＮＥを使おうということでやっているところなんですがね。大変いいご指摘をいただきました。ありがとうございました。

それでは蔭山委員さんお願いいたします。

＜蔭山委員＞

はい、私からもですね、先ほどからお話が出ているように、徳島にはやはりインターネット網が

地方のほうでも整備されているということですので、それを利用した授業の仕方ができればいいんじゃないかなと思います。それはやはり徳島市内の進学校といわれている高校と、やはり地方の高校ですと、先生の数ですとか、また、生徒さんの授業に対する雰囲気ですとかっていうのも違ってくることもあるかと思うんですけれども、中でも地方に住みながらも、やはり上位の大学を目指して勉強している人にも同じ機会が与えられるように、遠隔地での授業っていうのが可能になったらどんな生徒でも同じような機会が与えられるのではないかと思います。親元から、家から学校に通ってそこで同じ質の教育が受けられれば一番いいのかなと思います。オンラインの利点としまして、遠隔地でも同じ質の授業というのと、もうひとつは私が思うんですけれども、あまりクラス単位っていうところに縛られなくなるのではないかなと思います。私もそうだったんですけれども、高校のクラスは約３年間持ち上がりで、メンバーもほぼ固定でした。そうなると私の場合は特にいじめられたりということはなかったんですけれども、そこでもし人間関係がこじれてしまったりですとか、クラスでうまくいかなくなったら、受験どころか、やっぱり学校に通うこと自体が嫌になってしまう子もたくさんいると思うんですね。そこでオンラインということで自分で選択して自分で受けるっていうことができましたら、クラス間の流動性が生まれて、一人で受けたり、他のクラスにいる気の合うこと一緒に受けたりっていうことで、あんまりクラスに縛られなくなって、もしちょっと学校に嫌なことがあったり、友達と何かあってもそこが逃げ場になるのではないかと思います。不登校になる手前で、個人的に自分で勉強すればいいやって思える、一つの逃げ場って言うとおかしいですけれども、０か100かっていうんじゃなくて、自分は個人的に行って誰ともしゃべらずに授業を受けて帰ってくるよ、みたいなこともできるのではないかと思いました。

そのクラス単位の拘束性っていう意味では、担任の先生が教育も見て、個人の悩みも聞いて、進路も相談に乗ってというところが今でもたぶんあると思うんですけれども、それも担任の先生の考え方ですとか、価値観がもし生徒さんに合わなかった場合にものすごくそこで拘束力というか、逃げ場がなくなってしまう原因にもなるんじゃないかと思いまして、いじめであったり、精神的な問題であったり、進学の問題であったり、担任の先生以外にもうひとりカウンセリング的なことで相談できる先生が身近にいたらいいのではないかと思いました。

私も高校時代からアナウンサーになりたいと思っていたんですけれども、それで当時の先生に相談したところ、当時の先生は学部で考えなさいという発想の方で、例えばＡランクの大学の文学部を受けたら、次はＢランクの文学部、Ｃランクの文学部と受けなさいと言う方だったんですね。それはそれで正しいと思うんですけれども、私はアナウンサーになりたかったので、なんとか学校名が有名なところに行きたかったんです。だから、Ａランクの大学の文学部、社会学部、法学部なんでもいいから受けたいというふうに相談したところ、おまえの考え方はチャラチャラしていると言われてしまいまして。そうじゃない、その学部を目指してランクごとに受けていくものみたいな感じですごく言われたのを覚えてるんですね。でもその時点で私はどちらかというとそれよりは、なんとか大学っていう方を優先したかったので、ちょっとその先生にしか相談ができないっていうのが精神的に追い込まれたところがありました。最終的に自分の思うとおりにやって、夢が叶っているんですけれども、その先生の考え方ばかりに左右されないような何かシステム作りがあってもいいんじゃないかなと思いました。以上です。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。やはりＩＴを活用して、遠隔地はもとより、例えばクラスによ

ってオンラインで受けると、実はそのやり方でいくと発達障がいの皆さん方、つまり対人の付き合い方が苦手なんですよね。でも、ものすごく才能がある。そうした点を考えていくと、今の点はこれから考えていかないといけない、そうすると言っていただいた不登校の手前で止めることできるという、そもそも今回のこうした会議をなぜやらなきゃいけなくなったかというのは、そこから始まったところですんでね。これは我々としてもしっかり、もっというと徳島が答えを出していく、そうした役割があるのかもしれないですね。そして、今言われた担任制の部分というか相談の相手ですよね。おっしゃるとおりですよね。その先生分かってないですよね。私だったら全く違うアドバイスしたかもしれないですね。でも、夢が実現して何よりです。ありがとうございました。

それでは川眞田委員さんお願いします。

＜川眞田委員＞

新町川を守る会の川眞田です。今ちょっとお話にも出てきたんですけども、「資料３」の「(10)特別支援教育における専門性の充実」というところがあって、私、仕事で発達障がいの小学生から高校生くらいのお子さんと関わる仕事をしてまして、その中で今おっしゃったように特定の能力がすごく発達したお子さんもいらっしゃって、できたら、今の教育だと療育といって、社会の中でいかにコミュニケーションを取っていくのかという療育分野での支援はすごく充実していると思うんですけれども、せっかく小松島の発達支援ゾーンですとか、県西部にも新しい支援施設ができたと思うんですけれども、施設の専門家の方も充実しているので、療育から一歩進んで一般社会にその子がなじめるようにっていうんではなくて、更にその中で活躍していけるようにするにはどうするべきかっていうこと、お子さん方とふれあっていく中でよく考える機会があります。

一つは機会の喪失がすごく大きくって、ちょっと人混みが苦手だったりするんで、人が大勢いるところに行きにくいですとか、コミュニケーションが苦手だったりするので、学校にどうしても行きづらくなってしまって、本来だったら体験して、その子が得意だなと感じることができたらその能力を伸ばせたかもしれない機会を失うことがすごく多いので、できたらその子が自分の能力をのびのびと伸ばしていけるように、専門家の方の支援ですとか、地域の方とかも「あの子変わっているわよね」とかではなく、どういう障がいを持っていて、どういう特徴があるか、それ以外については、普通のお子さんと特に変わりはないっていう認識をもう少し強められたらいいかなと思います。

それと、あと一点なんですけど、発達障がいっていう最近すごく広まってきているなと感じるんですが、昔の偉人とかも、あの人も発達障がい、アインシュタインもそうだったんだよとかっていう感じで、発達障がいっていうとすごい特別な能力があって、みんながみんな天才なんだって思っている風潮があるので、たまたま接したりすると、別に特に秀でたものがある感じでもないなぁって、ちょっとがっかりされることが多いっていうのを親御さんから聞くこともあって、なので良い意味でも悪い意味でも特別ではなくて、一人の人間として普通の人だっていう認識を強める方向で啓発ができたらいいのかなというふうに感じています。

それと、特別支援教育について福祉的なものになってくるかもしれないんですけれども、幼稚園とか保育園に入るときに、例えばペースメーカーを入れているとか、何か障がいがある場合に、幼稚園に入るとなると看護師さんが常駐しているところでないと難しくなるのがあって、徳島市の場合ですと、徳島市の公共の幼稚園や保育園には入りづらくて、私立の保育園や幼稚園に委託というか補助金を出して、障がい児とかを受け入れてもらってる経緯があるんですけど、そうなると自分

が住んでいる地区の幼稚園や保育園に行きにくくなるので、共働きの家庭のお母さんとかが、送り迎えの時間とか朝のラッシュの時間とかすごく苦労されていると思うんですけども、かと言って保育園に行かなくて済むかというと、保育園というのは大事な教育の機会と思うので、そういう機会を失うというのはすごくもったいないなぁと思うので、その点で何かできることがあれば、単純に言うと受け入れをもう少し体制を整えてもらえると、すごく助かる保護者の方も多いのかなぁというふうに感じます。以上です。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。子どもさんたちが機会を失うことのないようにということが統一のテーマだったんではないかと。発達障がいについては、我々、ハナミズキ、アイリスと日本でも最初に取り組みましてね。そして、自立就労から今おっしゃっていただいたように、今度は得意分野を伸ばすんだっていう方向に持っていったらどうだろうかと。もう一つ、高度自閉症の人たち。見た感じは障がいがあるお子さんだけど、得意分野がある。その見かけでみんな判断しちゃいますんでね。そうしたところを親御さんたちもしっかり分かっていただかないといけないなと思います。

最後におっしゃっていただいた点については、教育としてもね、教育の平等というのを考えていくと、私学じゃないと受け入れられないといった点については確かに課題がある。もっと言うと、公立でもっとそうした点をやっていく必要が本来はある。これが公教育ということになりますので、こうした点については、確かに保健福祉とともにこれは教育として考えていく必要があると思いますので、大変ありがたいご指摘をいただきました。どうもありがとうございました。

それでは、福島副部会長さんお願いいたします。

＜福島副部会長＞

福島でございます。徳島教育大綱に対して、発言させていただく機会って結構、私いただいてまして、もう言い尽くしたようなところがあるんですけれども、ちょっと皆さん方のご意見と、先にいただいておりました竹内さん、岡田さんのご意見に対して私の思うところを申し上げたいと思います。何を言いたいかというと、社会がずっと変わってきて、文化、技術とかが発展、発達している中で、教育の制度だけがあまりドラスティックに変わっていないような気がいたしております。だから絶対に変えたほうがいいんだということはないんですけれども、何か新しいことをするという時はすごい費用も労力もかかるんですが、この社会の流れに対してオンラインとか、ビデオ教材を用いてというご指摘をされてますけれども、こういうのを用いてするべきところはしていただいて、だけどやっぱり触れられる距離で教育ができるという側面もあると思いますので、その辺りの使い分けとかっていうところもしっかりとご検討いただけたらと思います。

より高精度とか、教育のあり方、どんな子どもたちに育って欲しいかっていうのは、やっぱり大人が考えているところがあって、子どもたちの意見てどうやって吸い上げたらいいのかというところから始めていただきたいなと思います。やっぱり社会の変化もありますけれども、子どもも時代、時代によって自分たちがどうしたいか、教育を受けてこそどうしたいのかということが決められるようになるのかもしれないんですけれども、今、現在どういうことを思ってて、どんなふうであったらいいなって思っているのかっていうのをしっかりと吸い上げられるような何か仕組み作りというか、お声がけというのをしていただけれたらありがたいと思います。

オンラインの授業とかっていうのは今、「ｅＫ４」っていうのがありまして、国の補助金をいた

だいて、四国の大学で連携して事業をしてるんですけれども、その「ｅＫ４」の中では単位互換もできるようになってますので、こういったところも、高校までの教育の中で何か学べれるところというか、ここは見習ってても いいな、ここはちょっといけてないなっていうのを取捨選択していただきながら、また何かございましたら、私は中心メンバーでは全くないんですけれども、何かありましたら情報だけは流させていただきます。

なにが言いたいかっていうと、やっぱり子どもたちがいかに過ごしやすくて、そして、ただただわがままなだけではなく、我々から教育できるところはしないとダメなんですが、社会全体で育てていきましょうという皆さんの意見がそのものだと思いますので、先ほど、近森さんもおっしゃってましたが、大人に対する教育もしっかりとしていただいて、自らが学ばなければならないんですが、その辺り、その兼ね合いもいろいろあると思いますので、社会からできること、周りの大人ができることっていうのも教育大綱の中に踏まえていただいて、もうやらざるを得ないという状況にしていただいたらみんなやっていくのかと思いますので、その辺りのご検討お願いしたいと思います。以上でございます。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。一番最初に言われたことと、最後に言われたことが実は連携するんだと思いますね。教育はなかなか変わらない。それから教育の世界で新しいことをやるにはものすごく労力がいるっていうね。それと子どものわがままっていうだけでなくて、いろいろと意見をくみ取ってあげたいというね。大人っていうのは必ず子どもに枠をはめたがるんですよね。この枠の中で行動しなさいと。でも、子どもはこれが嫌なんでね。これを越えたいっていう。越えることによって新しい価値観とか世界ができるんですけれども、大人はめんどいよね。だんだん変わるということに対してしんどいなと思い始める。自分の価値観の中だけで泳ぎたいと。実はその典型の世界が教育の世界。私は昔から教育というのはね、大嫌いっていうのではないんだけれども、先生とは何考えとるんだってね。だから、勝手に授業をやったことがある。飯泉がやった方がいいよ。先生に変わって授業やってね。全部指摘するわけ。先生間違っているよ、それって。そしたら最後に、じゃあ飯泉やってよってね、小学校の時。そしたら飯泉の方が分かりやすいよねって。まぁ、授業崩壊、教室崩壊でないんだけどね、授業を乗っ取っちゃうのよね。その方がおもろいよなって。まぁ、ちょうど私の時にね、先生が初めてストライキやったの。先生が授業をボイコットしたのよ。学級委員だったのね。で、クラスのみんなが騒ぐじゃない、八時半になって。授業始まるのに先生来ないのね。だから、飯泉、なんとか先生呼んで来いよと言われて、うん、分かったって行った。職員室に先生みんないるのよ。先生授業だよって言ったら、飯泉君、先生たちも労働者だから。今日ね、ストライキしてるのって。そんなこと知らないわけ、我々。先生は聖職だと親に教えられ、先生の言うことは何でも聞けと言われてきたのね。それが先生自らがそれを打ち破ってしまったのね。先生たち労働者だから。ストライキしてるの。だから授業できないって。どうしたらいいのって言うと、飯泉君に授業任せるって。じゃあ、自習ってことですねと先生に問い詰めるわけですね。そしたら、普通は教室から出たらダメじゃない。ところが、外もいいのねって。もう全部僕に任せるとか言って。それで自習って黒板に書いてさ。じゃあ、飯泉外に出てもいいのかって男の子が言うわけね。いいよって、何でもいいからやってもいいって先生言ってたって。それで、家に帰って、今日、面白いことがあったって。おふくろはいつも先生は聖職者だから言うこと聞きなさいと言ってるの。でも、今日、労働者って言ってたよ。今日は授業なかったんだよって。ストライキしてる

って。おふくろ何も言わないで学校にすっ飛んでって。当時はそんなふうに親御さんが飛んでってね。一体労働者ってなんだってってね。だからそうした点を考えていくと、やっぱり、もっともっと子どもさんたちの自主性というかね、確かに、ルールは教えないといけない。これをやっちゃだめだよっていうセーフティーネット部分は言わないと犯罪者になっちゃうんで、そこは言うんだけど、ギリギリのところのやりたいところをやらせてみるっていうその目っていうかね。よく「県民目線で行政を」って言われるんですけど、そこをやっぱり理解して子ども目線。子どもの価値観に合うかどうか。だから、先生は立って子どもを見下ろすっていうのではなくて、保育所の先生方っていうのは必ずしゃがんで同じ目線で話すでしょう。そしたら、子供も自由に心開くようになるんですけど、上から見てこうしなさいって、もうこうなるのよね。だから、そうした点ももっと考えないといけない。これから教育現場でそれを考えていかないとなかなか難しいなと私はもう昔から思ってたね。ありがとうございました。

はい、青木部会長さんお願いいたします。

＜青木部会長＞

青木でございます。よろしくお願いいたします。実はですね、「“挙県一致”協議会」の時にやるんだと勢いよく意見を挙げさせていただいたのですけども、今日まで様々な視点、教育という言葉をしっかりと考えて参りまして、教育はやっぱりいつの時代も、個人的な考えですけれども、人づくりであるというふうに考えております。教育は徳島県の、今後の社会全体の未来の発展を実現する基盤、基礎だと思っております。それを考えるとずっと重みを感じてきて今日まで来てしまったなというのが本音でございます。そして今、時代は地方創生。人口減少社会が到来する中で東京一極集中を是正して、地方に人を育てて人を呼ぶ、そして、仕事を作ることで地方を活性化しようという地方創生の流れが今きてますよと。これは徳島県また全国も同じような流れでございます。その中で教育、じゃあ何かと言うと、やはり地方創生を進めていくのと同時に、私はそれを絡めまして、やっぱり私たちの暮らす徳島の郷土への愛着、徳島好きだよ、徳島ＬＯＶＥだよという愛着や誇りを持って地域を担う。そして、地域を支える人材を育成することがやっぱり僕は一番大事だと思っております。また、地方創生で今度は逆に外から人が来ます。外から人が来るときに呼び込むための地域の魅力づくりとしても、これは大事と思います。私は地域における教育力、これが今後の徳島の重要な視点であるという結論を導きました。それを踏まえて、これは意見を提出したのですけども、５つの教育の柱というのを思案して参りましたので、少し長くなりますが委員が皆さん５分ぐらいだったのでね、少しお話をさせて頂ければと思っております。私案でございます。１つ目は、やはりおもてなしの心の教育が大事だよと。２番目、グローバル人材育成の教育。３番目、防災に強い人材教育の育成。４番目、ふるさと徳島の歴史、文化の教育。そして、５番目は夢のある教育の実現というこの５つの視点でお話をさせていただきます。

１つ目、心を育む教育が一番大切であります。徳島らしさ、おもてなしの心を幼稚園とか小さい時期、小学校で学ぶ必要性があると強く感じてございます。学校、義務教育の中で国語や算数や理科や社会、もちろん授業は大事でございます。だけどもそうじゃなくて、もっと外へ出て。例えばこのおもてなしの心を学ぶのであれば、四国徳島にはおもてなしの文化、お遍路さんのお接待の文化がございます。私も小さい時、阿南市新野町に住んでいて、そこには平等寺という22番の札所があります。そこでやはりその頃から、私が小さい時を今思うと、お接待に行った覚えがあるんですね。それと、理科の授業で「地層を見に行こう。」といって、外へ、あの当時はいけなかったのか

も知れませんが、学校の先生に車で桑野川という川に連れて行っていただいて、見た覚えがあります。そういったふうに、外へ出て行く、フィールドワークを生かすという視点。そこの中からおもてなしの心や大切なことが学べれるんじゃないかなと考えてございます。

２点目、グローバル人材育成の教育。これは先ほど近森さんもいろいろおっしゃっていただきました。これはこの時期が来ると私、どの委員会でも発言しているのですね。もう知事はたぶん「青木またあれを言うのか。」というふうなことがあられるのかも知れません。これはもう間違いなくグローバル化社会で活躍するための環境、やっぱり国際交流ができる機会を増やすことが重要だという視点ですね。そうすると、これは何度も言っております。徳島県南部の牟岐町では、ＴＯＫＵＳＨＩＭＡ英語村があります。今年もありますね。これはもう絶対にやるべき。そして、継続するべき。これでプログラムの中で大事なのは、私これも必ず言っております、「教育＋地域の交流のモデル形成だ」という視点でございます。英語に特化して英語を学ぶ。当然でございます。そうじゃない。それ＋αの牟岐と牟岐の地元の方々との交流。お魚釣りをしたり、また、牟岐の文化を学んだり、ワークショップをしたりというその視点が僕は非常に大事だと。それが教育の＋αがこれからの徳島として大事なモデルじゃないかと。これはもう強く、強く、強くどの審議会、委員会でも発言させていただいている次第でございます。それを今後、次の会があるかも知れませんが、特区的なことで知事に是非とも、＋αで進めていっていただければと考えてございます。また、子どもたちが早い時期にですね、自分の将来を想像する機会を作る教育課程が大事ではないかと思っております。各教育の段階、小・中・高・大、そして社会人、生涯教育。個々の人生設計のプランに関する様々な自己を話し合うような場づくりが必要なんじゃないかなと思っております。そういった場は、私の人生の中になかったなと思っております。ですから、そういう場を作って、どうしていこう、こうしていこう、先ほどの蔭山さんの話じゃないですけれども、大学を選ぶときのお話のそういった場を作ってあげる。そういうのも僕は大事かなと、カテゴリーごとに大事かなと思っております。

それで話はまた変わりますが、続いて防災に強い。もうこれはもう何度も言っております。やはり、東南海巨大地震、南海トラフ巨大地震が必ず来るよと言われております。これはもう今まさに、確か今日でしたね、中高生の防災士の養成が今日始まっております。このようにですね、防災に関する中高生のボランティア力というのが、もし災害が発生したときには必ず必要になります。若い力が必要でございます。その視点を踏まえていただいて必ずや県南部圏域において四国発の高校における危機管理防災学科を創設するという方向性は大きな教育のひとつの、これは「徳島ならでは」であるし、四国初、そして西日本では舞子高校に継ぐ２番目という形になろうかと思います。是非とも、これは前進して、迎え撃っていただきたいと考えてございます。

そして、もう１つ。大事なふるさと徳島の歴史、文化の教育です。これはいろんな皆様からご発言があられるかも知れません。ここで、私大事なポイントを一つだけ申し上げますと、みんなフィールドワークをして自分の住んでいる所、町や歴史を学ぶ必要があるとみんな言います。まずは、知るという視点。知るという視点はもちろん大切でございます。知って、じゃあ次どうするかという、その次がなかなか皆さん発言がないのですね。一番大事なのは、やはり、地域の歴史、文化を知って、継承する教育。次世代に引き継いでいくよというその継承の問題。そこをやっぱりもう少し教育に取り入れていっていただきたいと考えております。人形浄瑠璃やいろんな文化。徳島には自慢する文化がたくさんあります。そういうのを、やはり継承する環境づくりを教育からやっていく。それはもう非常に大事な視点であろうかと考えてございます。

最後にですね、フィールドワークについてですが、各大学ではもうたくさんフィールドワーク、皆さん、神山に行ったり、美波に行ったりされております。それだけでなく、中高生も職場体験学習というのが教育の中でちょうど10月、11月ぐらいに組み込まれるケースが多いかと思っております。それをですね、委員の意見もあったのですけども、やっぱりキッザニアという子どもが好きな職業を体験するのが一番近くですと西宮だったかな。西日本では甲子園のある西宮にあったと思います。それをですね、リアルキッザニア。徳島県には、例えば漁師になりたいよって言えば、阿南市の椿泊の漁業組合青年部がある。林業がしたいよって言えば、那賀町の山武者さんがある。農業したいって言えば、若士さんがある。そして、上勝町で葉っぱビジネスを学び、ＩＴをするなら神山はもちろん、美波町もあります。そしてＬＥＤは日亜化学工業があるというふうに職場体験のフィールドがもう既にたくさんありますね。地域の中のコンテンツでの職場体験というのは、もう既に行われております。そうじゃない。フィールドは徳島県全体だよという視点を持っていただいて、そうすると逆に外からもっと人が呼べるんですね。そういった視点も教育の場で名付けて「徳島版リアルキッザニア」を是非とも、お願いしたいかなと考えております。

本当の最後です。最後の最後はやっぱり夢がある教育ですね。やっぱり夢がないと子どもたちは育ちません。僕は今でも夢を持っています。夢を持ちながら、やっぱり一流の作家とか音楽家、もちろんそれはＩＴ社長でも僕はいいんと思うんですね、そういった方々の講演会じゃないんです、講演会だともう座って聞いて「あぁよかったなぁ。ええすごい人だな。」という話で終わるんです。そうじゃなくて、こういったラフなトーキングみたいな時間とか、カフェでちょっと飲みながらというのでもいいと思います。そういったことをまさしく第一線級の方々と子どもたちがふれあう場をもう少し形を変えて講演会形式とかじゃなくて、もう少しラフな機会を増やしていっていただければ、未来の徳島の子どもは夢が持てるんじゃないか、もしかしたらなれるんじゃないか、私だってなれる、僕だってなれるという気持ちになるんじゃないかなと思っております。それと同時に2020年東京オリンピック。もうこれは絶対に言わなければいけないと思ってました。やっぱりスポーツ振興は大事です。徳島にはヴォルティスはあるし、インディゴソックスだってあります。国際的な舞台でも、徳島県出身の選手が2020年にテレビをつけたときに、「うわぁ、阿南のあいつが出てるよ。」みたいな。そういったのがやっぱり夢が持てますよね。それは、本人だけじゃなくて我々県民としても、また、若い今の我々としても夢があるんじゃないかと思っておりますので、たぶん既に始められていると思うのですけども、今のジュニア選手の発掘を進めて、教育の一貫した指導体制、一貫した指導体制というのはよく単発でアスリートなんとかって、こう単発でやられているようなイメージがどうしてもあるんですね。そうじゃない。やっぱり一貫して何年、ピックアップをしたら何年間ずっと継続して指導して本当にオリンピックを目指せるんだというような教育のシステムに特化するということも僕は徳島県としては新しい方向性じゃないかなと考えております。

最後の最後は、もう一点だけ。皆さん言っていただいたとおり、「グローバル化社会＝ＩＴ社会」を絡めた教育は全ての教育課程において大事だということが最後に得た視点でございます。是非ともこれを徳島県の大いなる教育大綱に組み込んでいただければと思います。以上でございます。

＜飯泉知事＞

はい、ありがとうございました。三人分話していただきました。それでは、佐野教育長さんお願いいたします。

＜佐野教育長＞

はい、まずは若者クリエイト部会の皆さん、貴重な意見をありがとうございました。いろんな視点がありまして、なかでも、徳島のブロードバンド環境を生かした教育、たくさん夢のある教育。それから、徳島のことを知ってそれを継承していく、夢を持ってそれにチャレンジする。それから発達障がい、あるいは、ハンディキャップを持った人たちも社会の中で競争をする。そういったことになるんだろうと思うんですけど。

ここで一つ、徳島で実現している、あるいは実現しかけていることについて、少しだけお話をさせていただきたいと思います。今ですね、チェーンスクールとパッケージスクールという言葉をお聞きになったことがあると思いますが、パッケージスクールと申しますのは、福祉施設とか幼稚園、保育所、小学校、それから中学校を一体化して、その中で異年齢教育、それから、地域の文化をそこで学ぼうとする概念で、これはですね、牟岐町の小学校、中学校と一体化してやっています。もう一つのチェーンスクールというのは、それぞれブロードバンド環境、ＩＣＴを活用して、複数の学校間で先生方が移動しないで子どもたちに教育をする。これについては、椿小学校、椿泊小学校、椿町中学校でやってます。これらについては２年前から知事が文部科学大臣に政策提言をしておりまして、今回、国の来年度予算にそれが組み込まれました。徳島発祥の人口減少社会における教育を実現しまして、高校でも、これ単位が認められるようになってきましたのでね、これを西の方、南の方で進めています。まだちょっと予算の関係で遅れてますけど、進めていきます。

それから、ハナミズキ、アイリスの話がありました。みなと高等学園で、去年は就職を希望する者23名中23名が就職できたんですけれども、今度は進学を希望している者が少数ですが増えてます。それは専門学校か大学か、両方あるわけですけれども、進学にも目を向けた教育をしていこうと考えています。

それから、サマースクール、いろいろお褒めいただきました。その中でまさに青木さんがおっしゃってましたが、いわゆる英語だけじゃなくて自分がどうやって生きるか、どういうふうなものを求めていくのか、あるいは、牟岐の方たちとの交流、まさにそれをやっておりまして、進化もしていると思います。予算の関係もありますが、是非とも、地域とも連携して進めていきたいなと考えております。

あと、高校生防災士のことです。144名ですか、中学生も含めて、資格取得を目指してますが、今後30年までに500人の防災士を育成して、そして徳島だけでなくて、彼らが防災士として全国で活躍できるなら、それはそれでいいと。徳島から防災教育を発信していくことでですね、南部の方に防災科をという話がありましたけれども、これは舞子高校に私も行ったことがありますが、なかなかちょっとですね、ハードルが高いと思います。高校生はもはや助けてもらう対象ではありませんので、過疎地においては有力な支援者になりますのでね、そのことを忘れないようにしていきたいと思います。

今、ご意見をいただきまして、その実現に向けて大綱にも積極的に反映していきたいと思いますが、皆さんも是非とも学校に足を運んでいただきたい。学校は遅れている部分もありますけれども、皆さんが思うより少し進んでいる部分もあるような気がします。我々自身も当然変わらなければいけないと思ってますので、これを機会に、教員としては子どもたち目線、県民目線、それから今、進化していこうと思っております。皆さんの貴重な意見を是非とも反映させて、子ども目線で、今言っていただきました、おもてなしの心、グローバル人材、防災に強い町、そして歴史・文化を継承する、夢のある教育、そういったものをですね、皆さん共通していると思うのですけれども、一

層取り組んでいきたいと思います。どうもありがとうございました。

＜飯泉知事＞

子ども目線ということですね。それでは教育委員会を代表して田村委員長代理、お願いいたします。

＜田村委員長職務代理者＞

失礼いたします。代表してと言われるとちょっとドキっとするんですけど。他の委員さんがいらしたらいろんな意見があると思いますが、今、佐野教育長さんがおっしゃったように、徳島県は教育が進んでいると思います。徳島から教育を変えていこうという気持ちで、教育委員メンバーも頑張っております。でも、皆さんのような若い方のご意見、部会長さんなんてとても情熱的で、横にいると倒されてしまうようなパワーを感じるんですけれども、こういう方が本当に徳島に一人、二人と多くなったら、教育行政なんてすぐ良くなっていくなって思いました。だから、この輪をどんどん広げていけると非常にいいなって思います。

私は、教育施設の一番中心である学校の中で、子どもたちが本当に学校を楽しいと思っているのかなっていうのが非常に気になっています。学校で学ぶことや、その学校の生活が面白いと思っていてくれることが一番大事だと思ってますので。現在、不登校がだんだん増えていますが、何が一番問題なのかっていうと、友達の関係ですよね。その次が学力の問題。そして三番目が学校の先生との関係っていうことが言われています。私も子どもたちと会話する中で、「学校ではこんなに元気ではない」って言う子どもたち。実際はとても元気な子なんですけれども、学校では抑えているって言うんです。抑えていないと目立つとやりにくいっていうような意見を聞くと悲しくなります。でも、先生方も必死なんですよね。何が悪いんだろうって思うんですけど。

前回の総合教育会議でも、先生方のご発表がありましたが、それはもうすばらしい発表で、こんな先生方が徳島に沢山いるとすぐ子どもは学力も人間的にも良くなると思いました。だから、先生方にはどんどんやってほしい。今、先生方は子どもたちをこういうふうに育てたいからこんなことがしたいんですって考えても、様々な制度があって、何か自由にやれない空気があるんではないかなって思うことがあります。そこを子どものために、もっともっと先生に元気に情熱的に行動してもらいたい。夢のある子どもたちを、自分ならどういうふうに育てたいかを、もっと具体的に校長先生とか、教育委員会とか、もしかしたら知事さんにとか、発言していただいて、何か制度のぎりぎり、もしかしたら制度をぶち破るぐらいの勢いで、教育を考えていくというような意気込みで、頑張ってほしいと思っています。そうすると教育するのも楽しい。すると受ける方も楽しい。なんかそういうふうな空気づくりをしたいですね。それはたぶん、みんなが作らないといけない。だから、その教育に対する情熱をどんどん外へ発信して、こうでない、ああでないとみんながブツブツ言うことによって、だんだん変わっていくなと思います。

それで今、教育もグローバル化ですよね。グローバルな感覚と言うんでしょうかね。そういう感覚を持って、日々を生きないといけない。原始の時代は、日々を生きるということ一つですよね。それがどんどん分化していって、生きるために一番大切にしないといけないことが遠くに行ってしまってる気がします。もっと、根本的な一番大事なことは何かということを、ちゃんと見ていく力が必要だと思うんですよね。よくは覚えてないんですけれども、テレビ番組で、集団の人が苦手という発達障がいの子どもの授業だったと思うんですが、イカスミを使ってドリアを作ろうというよ

うな授業だったんですが、その授業は子どもに生のイカと、タブレット一つ与えるだけなんですよ。あとは自分で考えろと。だから、子どもはイカスミの取り方もタブレットで調べて、何か分からないことがあれば自分から行動して聞きに行く。それで最終はイカスミドリアを作って食べるという授業。私、これだなって。教師というか指導者は、生徒が困ったときに少しずつアドバイスするのでいいと思うんです。でも、今の先生って逆で、一生懸命指導しようと思って、教材を並べてプリントいっぱい作って、お膳立てしっかりして、私はこれだけ子どもたちにサービスして一生懸命やってますよっていうような授業が多いんじゃないでしょうか。子どもたちが主体的になる授業は、もっと簡素化しないといけない。結果への様々な道を子どもが発見することに学ぶ面白さがあると思う。だから、地域にもどんどん出たらいいと思うんです。何か制限があるなら、もっと地域に出れるような教育体制を作らないと、教室の中だけではダイナミックで面白い学びはできないなと。一日中、外に出てると心は解放しますし、学びはいっぱいあります。教育について多くの人が語り、意見交換し合える機運は大切で、教育が大きく変われると思います。以上です。

＜飯泉知事＞

どうもありがとうございました。今日は若者クリエイト部会の皆様方から積極的にね。我々常に言うんですけれども、生徒さんたちに近い世代の皆さん方のご意見というかね。自分たちが学生あるいは生徒であった時の記憶がまだ鮮明に残っていたんで、そうした皆さん方からね、聞かないと、やっぱり年々歳を取ってきますとね、過去の良いところは美化して悪いところは忘れるのね。だから、こうしたらいいって言っても考えない。そうした意味では今回これは非常にいいきっかけを青木部会長さんからおっしゃっていただきましたので、このような意見交換会ができたのではないか思います。今日は皆さん方からお聞きをして、大きく二つなんだろうなと思ったんですね。

一つは、あらゆる分野における次世代育成。よく次世代育成というと、徳島新聞がやっていただいている「おぎゃっと」とかですね、子どもさんたちを育むっていうのが今まで使われてきたのですが、例えば文化にしてもスポーツにしても次世代育成、つまり後継者対策、さっき出ましたよね。これは必ずいるんですね。考えたら、ものづくりも後継者。超ベテランの人が世代交代を自ら感じて、誰に継いでもらおうかなって。あらゆる分野で次世代育成っていうのがいるんですよね。だから、あらゆることにそのチャレンジをするといったことが必要になってくるのではないかなと思っています。特に、先ほど青木部会長から言われたスポーツの分野ね、オリンピックとか。もう一つパラリンピックもこれあるので、県としてはスポーツ振興の基金を、これは毎年宝くじで３千万入れて、それから税金を２億円入れて基金を作っている。これは取り崩し型でやっていくんですが、目指せオリンピック選手育成事業っていうことで、育成費を渡す。オリンピックもパラリンピックも。そして、それを毎年、評価をするのです。評価をした上で、続けるか、思ったほどいってないなということだったら交代する。こういう形を取っていて、似たような話としては、例えばスポーツだった場合には、例のそれぞれの種目に応じてね、やってましたよね。

＜佐野教育長＞

はい。高校生スポーツ事業というのがありまして、これを進化させてそれぞれの学校の得意分野のスポーツに特化して強化しています。カテゴライズがあるのですけど、強いところは全国大会で勝っていける。地域の中で高等教育を、高校ではそういう感じで、これを今、中学校に広げていってます。

＜飯泉知事＞

従来はスポーツ指定校というのをやっていたのですが、今は渦潮高校のようなスポーツの拠点校を作るという形で、ターゲットはもちろんオリンピック、パラリンピックということになりますが、それを高校から中学に広げていこうという形をやっています。

もう一つはね、やっぱり夢のある教育。そして、子ども目線でどう対応していくのかと。さっき言われましたよね、不登校の話もそうだし、学校、一体どうなんだろう、何が悪いのだろうって田村教育委員さんも言われたんですが、子どもってね、楽しいことは何でもやるんですよ。ものすごく好奇心は旺盛なんでね。昔、コンセントをなんだろう、この穴ってね。ところがそこに挿すと、ストーブは点くし、テレビは点くし不思議だなぁと思って。三歳ぐらいから記憶あるんですが、マイナスのドライバーを突き刺してみたんですよ。なんかいいことあるだろうと思って。とんでもないことになったね、パッと火が飛んでね。ところが昔は持つところが木だったのでよかった。だから、そうした点でも、今思ってみたらね、やっぱり昔の人は考えてるのだなと。だから、子どもってね、本当にこう無茶苦茶するんですよ。でも、やってみたいと思ったらね、この衝動って止められないですよね。それを止めなさいって言うとなんか違う方向に行っちゃう。ダークサイドに入っちゃうんですよね。それをネット上でやっちゃうとかね。だからそうした点をぎりぎりのところまで見守ってあげて、場合によっては制度を変える。それをやっていく必要があるんじゃないかな。そして、一時期、傾向と対策っていうのが出始めたんですね。皆さん方も勉強したんじゃないですかね。昔はあんなのなかった。私が大学行ってすぐぐらいから突然始まったの。その後、人事担当なんかで、例えば自治省に入られたのは傾向と対策はなんですかねって真顔で聞くわけね。意味がない、そんなの。自分が情熱を持ってこれから30年以上、仕事をするわけ。傾向と対策はなんですかって、何を考えてるのって。そういうね、テクニックばっかりを教える教育になっちゃった。それができる子が優秀で、そういう子が先で蔭山さんの言われた有名な名だたる大学に行くことになるから日本の教育はこんなになっちゃったの。つまりね、発想力を磨かないと。田村教育委員さんが言っていただいた、何かを投げ与えてこれで何かやってごらんってね。おそらく100人いたら100人違うことすると思うんだよね。それでいいと思うんですよね。それをみんなすごい発想してるなっていうところから適性を見出すとか。これも一つだと思うんだけど、今そんなことしていない。もう最初から答えのあるものを出すでしょ。答えと違っていたらみんなバツするじゃない。だから例えば、私が知事になって最初に、徳島はこれから一石二鳥じゃなくて三鳥、四鳥だって。これを目指すんだってそういうふうに言ったの。そしたら、教育の現場からクレームがついたの。どういうことかって言うと、漢字のテストがあるでしょ。一石と書いてここをブランクにして鳥と書いてある。そしたらね、クラスで授業にならんって。子どもがね、三とか四を書いてくる。それで先生がバツをするじゃない。そしたらね、子どもがなんて言うかっていうと、先生と知事さんってどっちが偉いのって。知事さん、三とか四とか言ってるって。それで先生が、せめて、一石二鳥ならぬ三鳥、四鳥と言ってください。いきなり三鳥、四鳥は言わないでくださいって。まぁ、こういう話があったりね。あるいは高校総体の開会式で、みんな脳みそが筋肉になるまでがんばってというふうなことを言ったわけ。そしたら、またクレームがついた。知事さん、脳みそ筋肉だけはやめてって。勉強や授業に関わるのでと。筋肉になったらしわができるわけだからさ、しわの多い方が賢くなれる。まぁ、それは屁理屈になっちゃったんだけどね。だからその場その場に合うかたちでみんながんばってね、それに打ち込んだらいい。あなたがやってるってことはすばらしいよっていうことを子ども目線で言う。自分が思ったことだけを。でも、学校の先生はそう捉えないわけね。大人

の社会の常識で捉える。そんなことやったら授業になりませんとかね。義務教育も高校もそうなのよ。だから皆さんが言うように、今のこの教育の世界っていうのは一番変わるのに大変なとこですねって。でも、変えるべきなんだよね。だから、こんな会議ができるようになったわけ。それは、なんでかっていうと、尊い命が失われたから。子どもが学校に行きたくなくなるから。みんなマイナスばっかり。だから、今日いただいたような点っていうのはまさに一番子どもさんたちに近い人たちの意見なんで、我々としても具現化をしっかりと図れるようにと思います。今日は本当に貴重なご意見ありがとうございました。また、これからも是非、よろしくお願い申し上げたいと思います。

（司会進行）

＜七條政策創造部長＞

ありがとうございました。本日ご議論をいただきましたご意見につきましては、大綱策定の中で反映させていただくよう進めて参りたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。それでは、これで徳島教育大綱（仮称）策定に係る意見交換会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

以　上